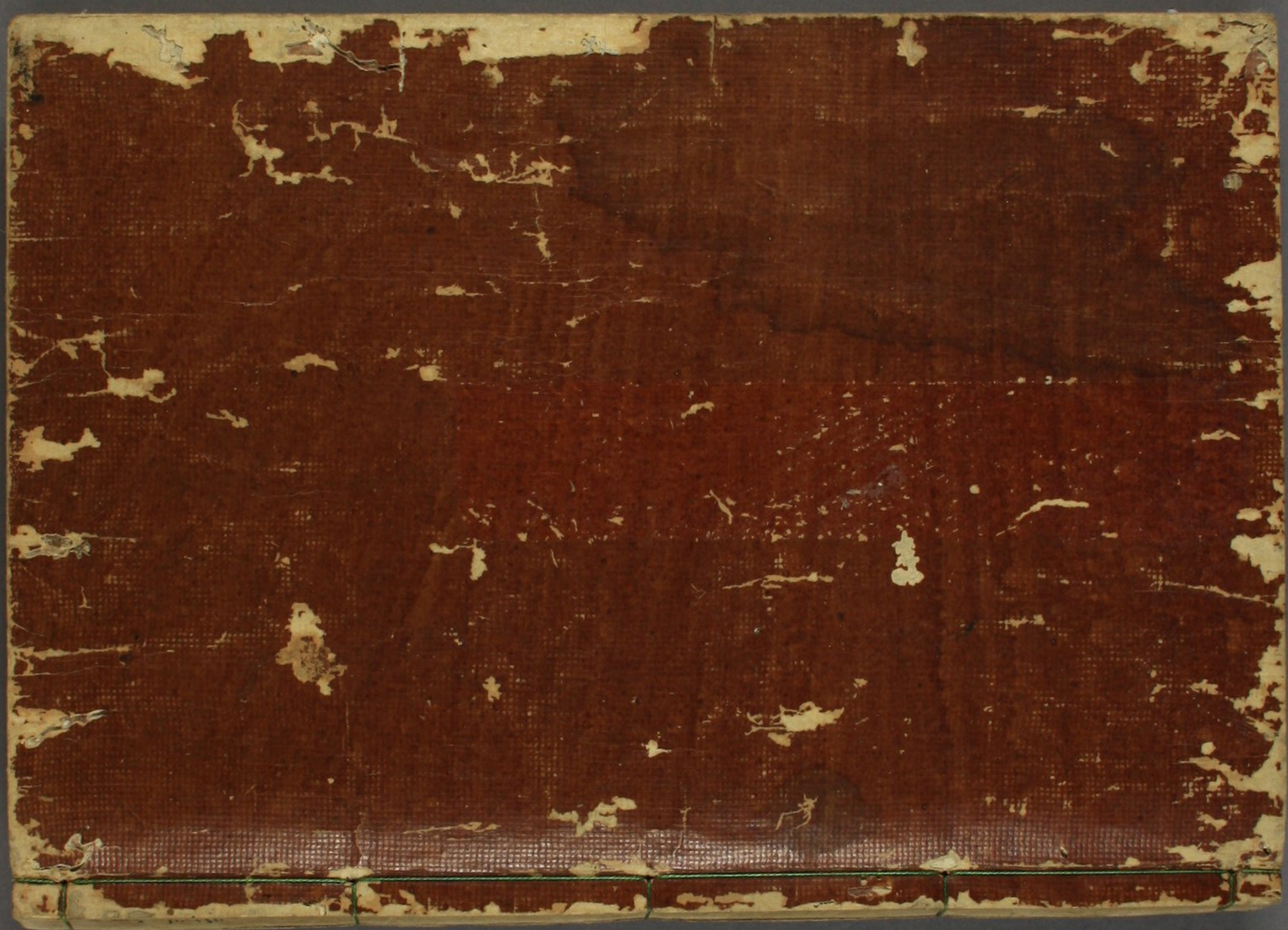


源氏世九より四十二までの巻まで
朱雀院のみ門おりゐ
御ありさまの後ものこりなひ
御ありさまを給はりあづかり
御ありさまを給はりあづかり
御ありさまを給はりあづかり

なりまし（朱筆ノ）けり。まづ湯どころにゆきて、
まうでて、（朱筆ノ）ゆるさるるまで、
ひとやごもりしてゐられしが、
ゐもそのすぢなるべく、抱（よ）き
抱（よ）き給（朱筆ノ）ふれば、（勝月）
大和の国柏（朱筆ノ）のことをまうしてゐる
うるはしぶくまゐりぬ。（源氏ノ）
けをされて、（朱筆ノ）ゆるされもれ心の中、いとなし、
まゐり心ざしてしを給ふ
ば、ひるくらもかしこに世中をうらやみ
やうにて（源氏ノ）うち給ふ。それ
れ中にまぎれて、うるはしき
ゐて、十三四ばかりにて（朱筆ノ）ゐ守（女三ノ）まし
つくそむきすて、やまごもりし後の世（女三ノ）うち
さうして、これを女のむすめ
すんと、ここのれうをうちゐ
るげく、西山なる（仁和寺ノ）ひじりをうつ
給ふ（朱ノ）ほどのれいそぎをせ
この（女三ノ）ゐのれまざのことをおぼ
うちやむごとなくおぼ（朱ノ）給（院ノ）
をばさるものにおぼされて、
すゝゆかうざうをば、（女三ノ）このれう

つくしそまつをのそ。そのうごくをもんごと
ここちよいれそゝぢむどもありけり玄文そ
うろれもやそまそへて。(朱ノ)紙そむうをそうべさ。
れそろづひとりもんとそさをまて。つくら物
のへりそ。(兼香教)女れもそひこそさをまて。まりおら
へりずぐれそうれもぢくそうぐ。
(玄文)家のくておりまれすくをのうぐりもくめで
それぐ。(朱ノ)ごろのれ物紙そまやうまそそうそ
そを治そり。(玄文)家よもろぐのくよをそもち治うん
れ心づひるどこそしもそ。(玄文)治れそうのほどよ
まもいとそうやとうびさをまて。れうもろこそも

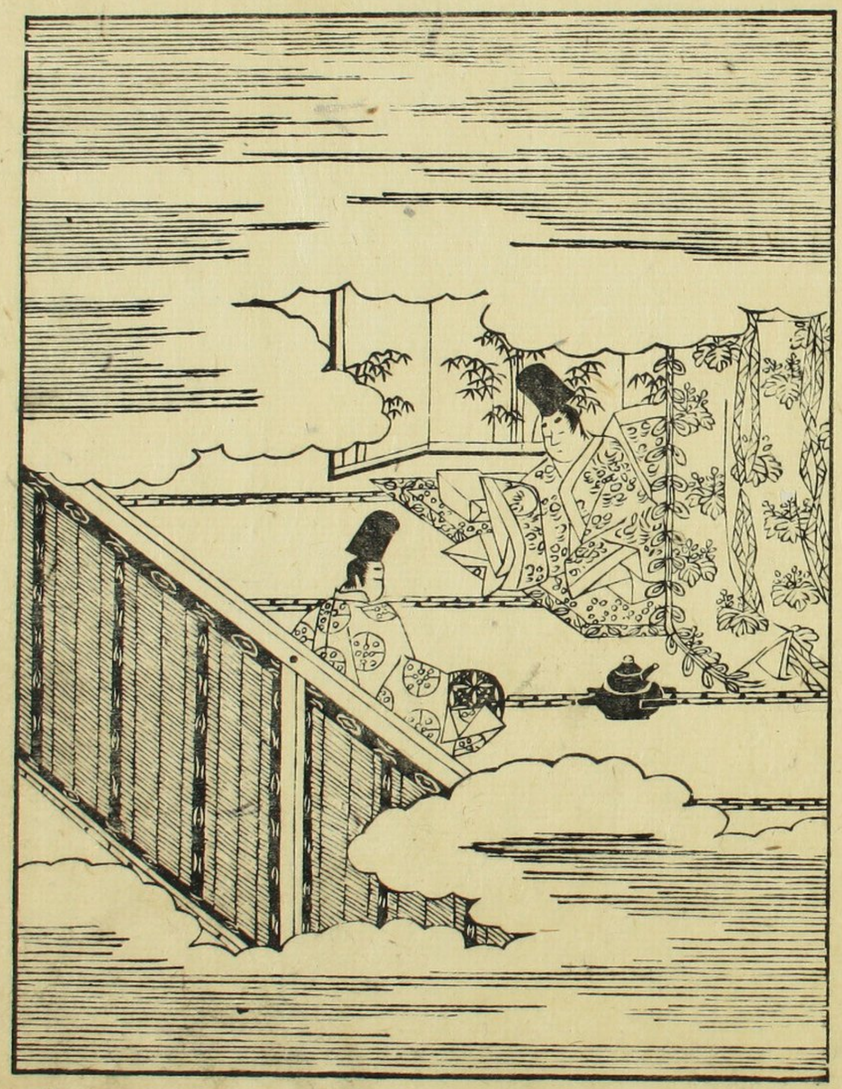
そまるそろぐしひりまれ
しまへぐとうもろやすくやそこさを治ぐ。(朱ノ雨)
世そうこのそうとも物ごまやるもん。れこめる
のそうぐまりもさをひやるもん。れこめを
れもほぐりめべうけ。さぐひまれ
うへこそしまも。女いそろりはまあも
あはすくへまおそめくすくをあるもん。
いとロあくるさいづれをもみやうもん
(玄文)れ世ま。心(ぞ)めてばし
そぐよ。その中ようもぐありそ。そそ
まもぐゆづり治り。(女三)文もんそけるさよひて

さぶひそうをそれもてそ
てん後のうるさでよひさそ
ろめくうつくしく侍といれめをて
そこを給へ 兼春名 れまもろうう
つぼさを給へ 也 それどそく 源氏文 女れの人うへまさる
ときめそ給へ 女三のみや をゆうり
このれ、ときをそてもぐ

れもやこまもとくるをもくちりまきこをもて、うすの
ともつでさ給ひずれもみてけてそときぐ
もやまもさ給ともありつれどいとくうちうへを
やこちさ面よいおつてまつをびい
ちおりぐりありとそてめうれそるねをさう
せこまへれどうをそのせうみそめうて
まうりまくへぐいまもちてくのでさされ
ありさ面を心やを所ま云条院(ほ)
ぐりい心をひそてあ
うりおれとみてひとぐくありぐもまいり
さまもべそう男名て(朱雲)院いらそくうへうべ

そこでしさもう給中納言のたまうをきく乃
うちなりつれてゐれまれごろうまやうもり
院のうへ桐つぼ帝の御つぼねのうちごころ
つゆ中まこの院(ほか)のれいとうれ冷うちのれいと
もんさりつきそのなひそこをきく(朱ノ口伝ノ事)
もりてこそぶりありそれべうちくの心ようせも
そこぶるまこと腹月多のあやまりまこころ
とれそまつることもありそんとやうをこそび
こころみれてそのこのへるそこ
もんもこころ面こもめさこころ
へまりぬれべとくこのて心うこと

そのむろひこゆめうこちんうへうり
ねりけるいまるんありようそのれろぐへ
はころぐべうんとせんへもむけるぐひけるを
まこのびとぐてまこころべる中とあり
めふまこもこもくこうべる中とあり
むつびこころろまはおひ
まるよそへてこのろのやうま
立まぐまくまるやとて中(まこのる)このそ
こくは男しもちうち相つぐ帝(朱ノ昇ナシ)
れは遠云ぐへぐつ面(今)のれこともも
すこのうれおこうけこそれ



月日をすごしくらんありくまゝ（ママ）
ちゞ（ママ）養（やう）し給（たま）ふ二十（はたち）よもぎ（ママ）
いとうくしくのひすぢにて、うちもうつぶせに
ほひて、いつゝゞくそのうちを、（朱）吹（ふき）めるとぐちにて、
うちもゝゝを給（たま）つゝ、これもて（ママ）ワづゝゝを給（たま）ふ娘（むすめ）子（こ）の、
ゆうゝゝろこばれをやちゞ（ママ）ひとそねぢ（ママ）ゝて
ゝゝゝゝ

朱刊 ねさなくのつろう。つまはすこのれは
ろうれ。ごごろ心えめさ風よそそしがいつく
おしろうしをそそやすさ地ろうこすごよねろく
ややとそそおれと。の給ろなふれろうをへうま
の給ろすろそろよ。おやしくそひめぐろす。
山ひめろやとろくそそしおろひて。さろべさひと
おろぐおづろて。ろろやすくせをもなひそれ
ぐやとろん。そしの給ろすろく。なれびうまり
ろそのふそろうありろれぐ。さやうのすぐうやとは
そひられど。おところろえごれをはろうをいく人
そそろろしさうん。ふ刊ぐそろぐしくもはろれ。

うろべもろろくひぐろくのこちんとごろ。そろしてて
やろめ。ゆ女ちどいのぞそてこ字て。いとき経ろをも
そこ給ろろうういられ。おろ老人刊
字ゆうを。ないちくろいいでさりとき。れ院涼のぞも
うりよおとをしれありさ風まはえちずろ人字し
給いぐりり。いとめもあやよろそそろろまれしし給
しられと。いひそろふを。ほろ来ノまろくは
れいいとさ風こくちりしめて。刊まろくは
それちろもわびまりて。ひうとはれをいべき
まやとそゆうまひちん。いとぐろそろまろふ。
ううろぐちてもぐしろうれぜ。

いけうくおごやうなめをそうちをこぐめりすうをゑ
うちとけてそゝろわれごとをしあそべど
そのさまようつけていまう地おもくおらざやういさ
ありつくうつくそのさまとのおもびおもさそそぞうよ
ありづくされおよごとくもそもそもれて
めづくうる人のう程ありう。その（掏つぎ帝）ていまうのうぞりちくうるおもうまのひ。さは
うりちぞでうづき。男ようへそそうそうそうど。
心のものまもをごうずひびづて。共（そこ）がうちまは納（ふごん）云
よおるうずぬまそうびとろあまりてや。寧（なまそ）まて
大和（タイ）なけのへうんそれもいとそよおく

すそうめいづさくのてのおびくのまそおか
めりうう。おくまようこうさそのぐえん心もりね
おどいこれもおそうくをとうまくまでおやまりても
おうすけまそりうおびしいとうもありおど
かぞさそ経。ひめ（芸）やのいとうびて。いつく
ある心おされ宿（来ノ）ねるをこそ（元）も。
そやうなりいまるうんくをど。
そくうへのひおんことのそろやそ
うんおづけさそしどやるぐ笑ねどもるうさ
れめれそぐもめうおて。れ（会ノ）もぐ
そすつでよ。六条（涼）のおくど

(朱)むすめ、はよーこそ、そんやうな、このやをあげ
ろてもぐらまん人へもぐれこぐ人のちよいあて
ぐこ、(冷)ゐる(朱)中ぐ(朱)ぎこひ(朱)ぎこのやうなぐこ
とてもいとやんごとなきうまれをこそうまれ
そろぐこそうこそろこそあるくて、やうのまでらひ
いとちよくあるこんでの(朱)指ゞ中納言の(朱)ひさり
ありつゝ(朱)指ゞうちうすめてこそ心うべうなれ
ワろれどいとこそやうこそくこそ。なひさこれもーげ
ある人ぞあるをとの(朱)給ひす(朱)中納言(朱)いまくより
いとまめびこそて、幸びまこ(朱)かの(朱)指ゞ心をつけて
はふ給よこひうのろふべくも(朱)指ゞうけこ。

そのこひろひていふとぐゆくぐろゆろぐ。
(朱)ゐる(朱)院こそ中くもいふこつけても人を
ゆーくゆぼーろ心いうこぼまれをも給なれ。
その中ぞもやむごくもの(朱)さいや(朱)撰ゞ
(朱)殊院ぐをも。いまよワ
(朱)れくゝもそ。(朱)ぐそのかろ
うころろされたの給ふれぐ。(朱)比(朱)ゐる(朱)ぎこ乃
ろこまこーづこものて。(朱)女三ノ(朱)ぐ院こそうべきなひこ
ありともをやごてなぼこぶろろて。
さもやゆづりをこそーもぐでもそーの守
(朱)べ(朱)まくよすこもぐこそてあこんとこいん

女ぼうがおもてへ
あれぐるまをまはしてくれ人のあるようにそれ
あのひざいさぐるり心ゆくあるのようにそれ
ゆくありさ後までそこそこすぐ
さ後はしくれ朱これ女ぼうがおもてへ
ともにるずむつびひようるまで時ちぐ
るんおぼしまでれ心のちょうむの脇
ことりでやとの絵かきてこのれうしろこ
忘のれともそこへ
どまれるようをもくしされのまをうと
右中弁あるれ院のちるる人まで
つうまるうるりこの女三のやまも心をくまで

さうくへばまの(たゞ中弁ノ
先おとゝ)うへあるんちるくれ弘文まてそこそ給しをそれ
院(源)よりあるいもしひとりかりまで守こ
ざ随つけてうろそ小例のことをのへこそちを
てもれうちるしく給人あるいまげちを
朱うへを亜(とき)そまるてまごろよさひ笑のべき
ひともけれがをのれうまるそもおよ
ぐりの女づへよあるんつが心ひとろもも
あそでをのづくひのおのくもおりまし
ろぐちるさまはうる後(おと)ありんとるまはうる後り

えほうづきうりこん（昨夜）のれんずるよ。ときもくも
このれこそぶまちうりバうりくちん
あるべきうりさすぢとそれど。そんなかいつと
すくをさぶめづくなうります掛もれがろげよ
るげーくぐあまるのれ中よ。（女三と）ざりつきそて
さも絵こつけてもん人のそれこそあべるをいそで
ちりもすん人をこぶとるふよ。（左中弁羽）弁いっなるべき
れこそこうあこん。（ほ）院いあやしきまでれ心ちぐく。
うりまてもそめの人へいれろうまりうろ
をもそこもあるぐりりをもうるぐり
つけて弱ざりのひて。あまるいどへ笑のへれど。

やむごとなくはぼーこうりありて。（宮ノ）ひとろ
ちあれがそれよとうりて。うひちげちすまる
ちを絵るぐこそいはるをれすくをありて。
ま（宮ノ）人とまるとる。こちちぬみこくい
えあしぐとそいをうこそれど私いぐと。ぐろ
るくこありてちんはゆる。ろいは山よれこうへそ
ろの世ますぐて。ま心もとることいるち紙。
かのすぢそちん。人のまぐをもあひ。ぐ心ちも
あるめこともあるとちん。づるようちくのすうひ
ぐこまもはぼ（ほ）ーの絵うよ。げををのれろぐご

そまつなるつまおそうぐうつてれげようくしやへるへられそのもちぐされうきいといもれしくへどをまて院（ほ）のれありうあるへどもうぐりあうんとうくふをのれとうぐ（ほか）ちくんちやまげ（たけかぐら）しぐれ院（ほ）よいうまずのれはいうまひてはくんうだのれはいうひてはぐしめべうくうをうるのれゆうしまくとありめべくい。

つくへうえんとうんアはをいうべうべうことよいはうんぼどくまつてひられたくれぼしつうきまへつうをぐうれれど（女三ノ）うくへぐまへうくづひうよへうちうびううことへのあねうをうぐうきくまやはうんれうしうぐうはもはめりうくぼしうぐうへとまればぐうまあべうくせ中をれ心すぐしのべうをひ（女三）やいあうくぼつうくのそそうを。

どつるを。うるさはいもとげざるりめぐさ吵ちの
するよ。そのまよはされてるん。れ六条のおとぐい
げまりともものこうそ。うろやすきろいう
うまりるんを。うるぐりあまるれうる
べき人ごを。そうべうまもあぐー。とてもくく
ても人の心うるり。のぐるおちめて。おるるの
うれまあーごも。うろやすきるいおるべき地
をうる人るり。さごでうろーうべうひとうれ
ぐりうたあうん。當 おうる。人ごいめやすうう。
おるで。すぐうそ。ごと人とつきもべさ
まだあーれぐ。おまりいうーうぐー。

せまきうるをうれて。すうるうん。れさうるへをいとうれまーげちく
すうるうん。れさうるへをいとうれまーげちく
ちんあり。まる。お納言（物ノ別当ベキ三ノ家司ヲノゾムトソウ）の私宅の家つさのぞむる
まうるこ。あまやうるべさこりいあ
れど。すぐるいうよぐや。さやりをてるべう
うすく。おをめぐ風しくちんあるべさむうもう
やうあうそいよい。行ぐもへよるぶく
あるよ。こうりてそありれ。ぶひへよるる
ちくまちんうるぐうをうこさるよあひ
きぶめんいとあぐらおーうるべさかごよ
ちん。太満の修（柏ノ守ノ略）のうこまいぶるう。関伯（脱）修のもの

きこれし。その人（柏）ぐ
ねめて。をぢこもりかがるど仕とをひよりぬ
べき紙。まぐさいとゝ
ありくて。やまずとてゐて。
いくもづもり。さあれるくひをまいめけて。
ぞえるどるこまるくつねよいろゝ終と
るべき人るれいゆくすゑもそれどるをえ
このめるとこひそんよいうぐりでおるやと。
ろぐよおばしこひりやうもばし
うぬあのえうをせばけてもまあのあ
人るし。あやくうろくのおりすふれさ

めさごまをのづくひろごりて。心をつて
さ人ぐおりうり。おさおくばこの（柏）場乃。
今までひりのこあり。ここちぐへえで
とさへるをうれそぐめをものでさるありる。
さやうもをむけてまりて。めようきれ
こん時いぐりワるめもめんばくありて。
うれくんそそつくへ終ちりり。
こいそれあの小（ぢ）のくるをそつくへ終ちりり。
ろぐりるさ云の葉をつくてそうをを也。
れくる終つくも終終。（者）安いた（ひげ）ちねの小（むぐ）のくるを
ぼそづのて。（ノ）くるんさろもありくく

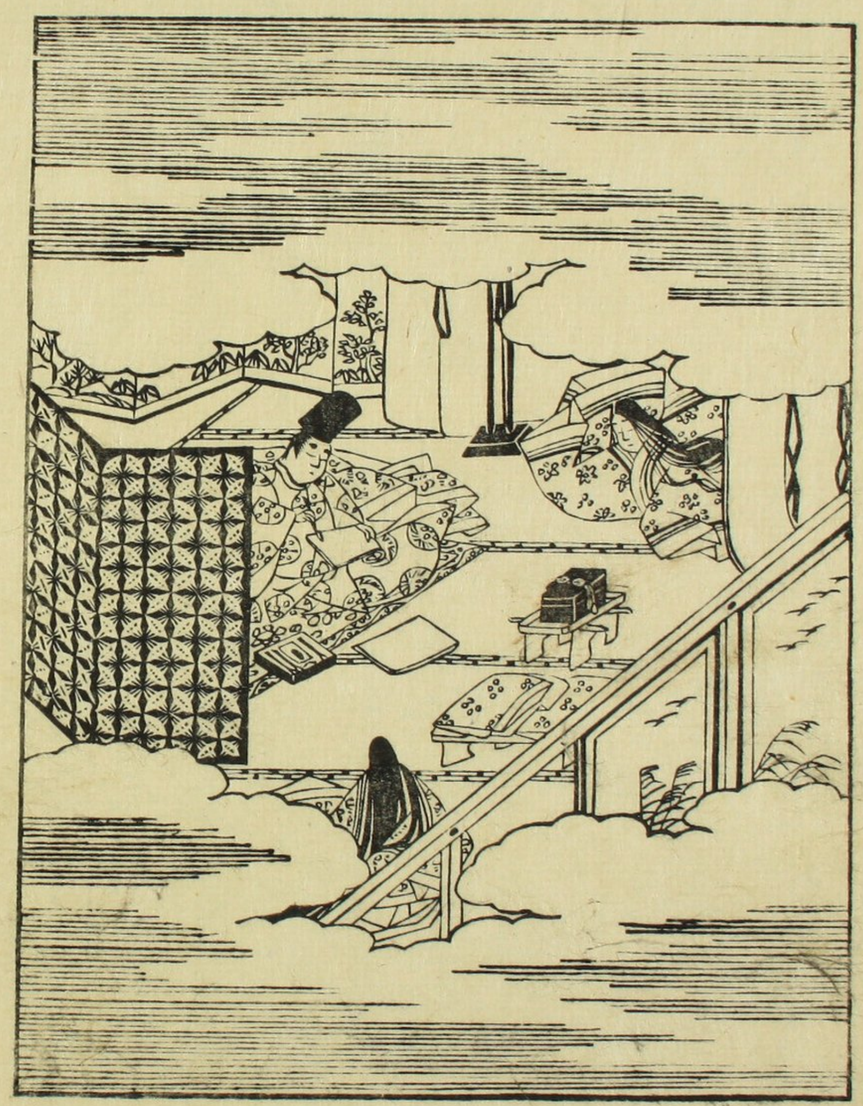
さしおろうごうつまれとうものせき
ゆめともなべさくるをよくそしめ
めぐらすべきこともり人べぐろろしてもうて
人いうぐりあるをおをしろくなるが
の院云衆院ここそおやざ面よゆづり男さを給い
めともんワざとれをうそこりいおれどれ
そきありけうを。まちきを給てもげこうこと
あり。いとうくばしの給うをうとうくれ
心ざをおて。まづ弁てぞ。ぐあおい
つく男さを給けこのなのくばし
ワづふ面いき紀ぐもれ男をきうへれだ。

ろろぐきれくはありすくるとそこまる
くぐくちをられそまつべさそてうそのれ
うちろこのくをびうけうりまんげこをぐいを
おやもろめて。ままだぐしのなどものうともまる
うざりあばなることつけていづれのれるさ
ちをもようそこそまりるべこともち
あれぐもうくりつそきをりうこそ
んをばとこそいうちくしめくありふを。
それざるいと不定ふうるやとし
のおて。ひとへよれまそまうべさ

すぢむつびもれ
つぎうをさうん
こあるもおさうめ
ゐどいうつくうん
ささとをそて人
ともめめぐさおひ
ゐどうこるうん
さう人さぶまりそて
ふやおんゐどの
もれうさはるを
もおうめをくの

夜のうち抱(ほ)どもなほくもゐ入(い)り雲(くも)ひいとゝろくもれどもいとゝ
くもらぬ空(そら)のさまなどいとをかしう梁(はり)なる出(いで)のだいの引出(ひきいだ)物(もの)など
けう中(秋好)宮(きう)のうつくしうそくやかなるさまなどいとゝ心(こゝろ)
てうぞくせさせて(秋好女房ひとしきに)昔(むかし)のれいあげの具(ぐ)ゆゑあるを
尽(つく)しあつめてさすがにいとくのころぞかし(秋好女房ほとゝぎす)
うぐひすなどいふ(中宮方女房)声(こゑ)の程(ほど)のすけ(女三)院(ゐん)の御(おん)前(まへ)(彼)
まで(女三)院(ゐん)宮(みや)のれ方(がた)よまいつゝすべくの給(たま)はせつれど
ろこゝそ中(なか)よりけり
(秋好)
さうぞく昔(むかし)を今(いま)よつゝれがみのそぐ

神(かみ)さびよけう(朱)院(ゐん)のこんじつけておくれこゝ
野(の)ゝこゝもありそう(中宮方女房)おえ抱(ほ)けうういあぐと
ゆつり(女三)きこしめすほどげにおもぶせうきえん
ざまなれがれうも(秋好ノ女房ニ云ヒ抱ケノヨウ)むうの衣(きぬ)をがう(き)垂(た)て
(朱)
さつぐこゝろ抱(ほ)ともがうげ世(よ)をけぎの
をぐのこゝぶろまで(地)ぐそ祝(いはひ)こゝこゝへる



（第八）
れ心ちいとくるしうをぼえて。
（おこりやまひ）
このれいそぎもてめれど。三日ゐて。つゐにはかなくなりぬ。
おやうち（泣）よろこぶ程の人のうへてぞよべまた
とて面ぐろいかもつげまうわざもされどまして
いと哀げなる方ぐもおほかり。
（第九）
（胸）
いつとまつひて。ふしまろびくるしむを。
（第十）
うらへうめて。子をそみ
（第十一）
物ひまこまへる前のうへ（胸）（ノ）く
れ心ぞれめべそれどおもちこれけうそくそう
うりのて。山の在（ざ）をうちめてそれいむことのあ
ざうこへまつひて。ゆうぐ行（ゆ）く世（よ）

天皇の儀式というけぞ
ほしうさ酒もでい心こと
ので、例のとくくーく
上達ぁもぢうべきぞ
ぺる候ないうぐく物
もされこちを御し
つうさ酒もぞ。ぞ御
ようそいろうて、これを
ほのこなり給ふんうるもの
とぐめぐくおばうれば
給ぞ。河桐帝
給候をそれを

別なふれうつくうて。ぞつて世をそひ
すまーうう侍遊ちぢぞ酒もえうぐめべまーて
ぬ家こち。女れ更衣こくの男をんかうこーを
ゆすうちてさぢむ。いい心おそうーう。
くらでもぢやうて家ひのぢ六条院を。
すうーれ心ちろうくとぞをもて。家のれさ
うぢりのふちぢこそ。これあるぢごとおりおの乃
みぢくくさくさまりのくれや。まーく生おと

うちろめたくこそつづくれ
くるまを心(ふん)ぐるまとそまつり給れこころの
うちもさすがゆかしくて
ぐーすぐーぐるてげ(羽)こくへうをくう
すぢいつさうご殿のやうちもきいちもの
げうつつぎまんぢけ葉ぐるてをつまをべ
いとうこさす忍のせのまうけのきこと。おのれ
きつこのさぶまうをまつてこの
れこと宮くそをこ殿もんこと。一こと。
そろそうよろめゃなべきさは仏ぐひべきこ
ゆくこさのこおぼしまも仏ぐれど

げこと(ぐう)恨あれば仏はやけくまりをひよれきうり
ごとれこころよろうべーとはいひすぐ女のれ
まあよおよぐりのけぎやうちれ心うをおうべき
なも仏ぐりり。すべてかのゆうあうは。さ殿ぐ
まことのれうちろこしすべきれおをこうべき
すぢよりをこ。えこさめれまもりめ仏ろんうちろやすうべき
こよ仏うをお伝ちおてのちのれれうこぐひ
のうべくいろーこさよおぼーこひて。(ちぐの)まって
こうべきれおづりをぐめをのべこよあん
仏うと。(美)しゃ(娘)さやうよさひうこと仏れど。

それもうそうそうちゃんそうけうつうつへのつあて
そうそうかうよも。世をそうそうかうこうごと。
人をえうひてざうさ面のことをしうへうごひ
ゐりうり。まいてうく今うとこの世をもちうく
ごけまて。こうくうくやめべうまもあうごまうさ
ふうするう中うも。持ごうそうさこうあうて。さ面ごうよ
やひつごひゐけうとやまひをまりゆくごうり
へすべきうをあうめ相風のうゆけ心あうて
うくちゃん。うさいうそうゆづうれど。このいうけ
ある（芸ヲ）関就をひとり（もり）をけうそうてうごうて。うり
べきうまずなも心よゐばし

と哭（泣）きまたうる紙（狩）中納言ちどのひうり抱（抱）
ゐ。すうそうべくこそありうれ（なれ）ばいまうちぎ
うよちゃんでうれて。ねうくゐうるうる（深川）中納言（タ）紙（紙）
まうりめべくゐうを。ゐごもまるうくて。ぬごり
すうすくこそゐうあうごうとをみうさゐ
まて。うそうろうこうしうさを。ゐうんこ。おうそうまれ
びようそうていゐ（ヒノ）ごをうごりう紀（記）うごび
うて。ごうまりうすうとや。ゐうんとうごた
しうさるのうちゃん。ころごうけうごう
ひうさよゐうへめれ（化）ばおうごの（ね）ごも。まうう

（ほんのれうの系二）
それ遥かなるもろもろ（業）これ前の
精をこうじ拘ねて、うつつうつ
つ（業）院のれまんをんうつ
など、昔ようりてまつりれ
ありすぢのくもあれど、うさぐれがり
みてこり給、課どもつき
れせうまつり給おうぐ
いとぐれ風くつて、うさぐりちやまく
ばされど、この（去）のやうに笑しさふ先ひを
ころやすくばーうり（ほん）六条院いちまぶうう
さ御くばーうぐう、むー

さぐめるど、うそもはのうさ給それど（紫）もあう
ど、前（猶さいわ）世院をもねんびこ笑給やうありしど、
つぐうもばーうぐずありうをなど笑て
ううやありともひ笑給ぬおるごうも
なくておうするいぐ（ほん）ばうくぶことをつうなば
む、我心い事もうううまぐ
みてお（紫）ううくまうめ、ううぐめ
給いざんね程つうひうぐひ給うんなど、やすうぐ
ばさう、今（也）のうぐびと数てうさ
笑し給うく、表あれ中れぐうぐ
備（ぶ）おーううくあんもいぐ（業ううほんのれうの系二）

まうくるていはゞくに心やすく
てもゐんをゝれ（源氏又）女のれうと
笠と女三ノ宮ことゞ
うとうくすゝおぼしくずまし
（源汙）
おまうりうおとけまゝれゆ
うこゝろのくこそおれまゝ
してゝまれも人もゆそてゝ
給はゞゝつくゝ衣よゐん（ひ）
こと学のれのゐゝすべて
ゐん（ご）ひ外ろこそれ人のちとゝまの
らひるゞゝうちゆくゆゞこ
抱ちまりをゝ心ひとれまこそゞめてゝおり商まる

ぶゐんおろゝまゞこそこそゝてゝおいちろ（恨）し
給ちゞゝうとくそくへ学（笠ん）心のうちまゝくを
ろういでこそこるやうゐるこゝそゝのれ給ろゐか
いつもゐろこるまるゞひゞゝをれがゞちのろろ
ろうをそゝれろけこそまもゝおしゞ学べき方ゐるき
抱ろゝおこゞまくゝひむすゞゝゐ商世人
ゐまりこそゝゞゝ或ゝこ文のゐ（笠ノ上）方つれろ
うけつゞけゐろこゞまゞ紙の給出ゝゝおゞきゐき
ひげ（ご）ゐのれこゝそこへおやろくゝ恨（うら）それこ給ゐうを
やうゐこそゝゝいちゞくゝこひおを給ゐん

ものおつくうの人のれうとつくでうも
うぢうのうまれちうんいまたうともとのこ
つぐこをこのあぐうてきけうせのひと
つへちんこをもうさひけぐへど
つくおつくうのこまてきうぬ（涼）年まうぬ
事経（女三）院よい姫宮（涼）六条院よううひ給んれつそぐ
そのふ（女二）宮給へうへぐいつくなぐしく
ちぐ（冷）うちもれ心ぐへありて宮給けう行よ
うれさぐめをうつてなぐしこまりよ
うぢうういうこそぐ（涼）そぐだよ吸給けれぐ（が）れ契乃
こぐなけうもうこすぐさぬ世中のつく

あこまてうねてうひぐくをことのつぐひなほく
いうーこととい昔ようこのこ給もれ（涼）心てぐこれ
うへさひよ給（むす）正月廿三日子の日ちうう古（ひげ）ぶ
のお方（むす）れまり給うねてうこもまーこ給
もぐでいとうくぬぐしまけうれ
ぬまてえ（涼）つうへしこれどさぐうのれいつ給ひあれぐ（む）いつのふ
儀式（きーこ）ぐいとひぐうこもや（六条院）このおとぐの西の（う）
うちものぐまおまーうふ廊尾べきろうもぐで
かあさうーくうこひうれうりうりーく
つまぐいうぐずれぐ

けうそくなどすべてそのれいぎをもっていとそうそうまをさせのくうらそんのごぜんにうひろう。此衣をごぜうすへて。夜冬のれうそくこれすでもゆすうつきをもうくそうそうをつくしまはだんもそうそんをいのちをもおるでさうひろうこころぜへうつまくうそんの名地のこやびやく。うどのきのへる人そてのちをめるれめさ面うちるへり。大方のくちをだしこうとくしうくうちのれうへぐまうり。

（添）つぐおとそてむうんの名まれ對面（そのめん）ありれ心（ほの）のうちうは。つうくへおぼーせうとも。さ面ぐうりけうて。そつくさそうそうそぐひうぐへまやとおぼゆうさ面れる面差うく。人のおやげうくおそーまうをめぐうくぐうもつくうれぐれ私月へぶそてむうりおうそ。けぐやうるうへぶそてもうくて。此物從（ほうか）（後ろ名前をお大事に）おさるさ名もいとうりうそ名しれんの名いうちぐさそもれうくれぐとの結ろれを。おねのうろのぞうぐうそよ。はうんぐれんぐさをんとそて。



みやづかへ（添ノ）ところしてのち
のひさしつゝき給ふ（堂ノ父ノ内ノ）こといまいりてくく
なほ（添ノ）これがれをゝそれこゝあるをけるうくし
うきされちるこのまゝにてびんなくてはさけてぞ
がまゝてうれもするひうらめるのうち
ひげぐろ
なもげよ心やまげるうちざりてはし
おおいのえだへ
えぬ道にいづるこゝちもおりえそうやく
ためふさこもれこえそぐおりひつ抱きをしら中納言（タ）を
まぢのまりてさえべき恨とりてけりこえ
らけぞり（ろ）おもの（ろ）のれあつ抱（ほ）まいるれまへさばん

のみぞんでうおほんつきどもをうつくしくいつき
ゝうほどごとをゝれうり。第壹院のゆうりのこと。
すべて多くつゞきてゝ給ふめり。家へをどゝめさず。
それ猶ありがたおとぐのそのうつくしきのへのこと。
世中ことのれ笑うりゝ又めづらしくうつくしうさつく
べきことあるごとのそのひとをそれの限を
ねてうりおほしまりけうられば。おとびやうう
れおそびありぐうりぐよなをうちよ。和琴(わごん)もゝ忘
おとぐの第一(だいいち)ひ。絃(いと)ばけられことあり。さうもよく
よ(ず)ほの心をとゞめてゝ引ちべくれいとうるび
るゝことゝ人いうさゝてゝようゝのへば太鼓(拍)つ
くゝいうぶうをゝ(ぐう)をあのへでゝげよいとおうろく。
おうきく(なな)ととうもぐくひ(柏)くゝ。ぐゝ。ぐゝこえ。
ひうぶ。ぐゝこえ。
うう衣よ人ぐおほし。そこべよるがひて。おと
あうほどゝしさぶうれうもあうこのうえへでも。中く
ぶのとうべうあうをこうまうをて
ぶうあうをうすぶうのもれね
ものへられうかえまな。ろく。おやしき
まぐのぐくうぐれをもいとゆうり
もうて。いうぐぶてゝおとぐくあうを
てぞうさうゝのふうれものうううう。の

ぼうれのうてくおつぐさやうつきあかをつと
くうちもこいこそそしぐりーをとみこそちもおごろき
治琴（こん　雲）の音うてまひきおひきおとお宣湯殿（ぎゃうどの）おん地
うて代（だい）くまま一（ぢ）のあおりーれ琴（こと）を招帝（せうてい）院の表（おもて）つ
う一（ぢ）お家（いへ）（本（ほん）ハ脱（ぬけ）れ）このこ治（ぢ）こと
切りのこうをけうくをはぼすまいとあそれま
戸治（ぢ）りかくるれつくへ
昔のことも色（いろ）くはぼしーせうこもちへちきえ
とぐの治（ぢ）のずれ（ぬ）そうきさうりのてくんもおほへま猿（ざる）
こそしきき治（ぢ）ほんきまくへ表（おもて）ま猿（ざる）
地ひくけぐうひきき治（ぢ）よくくうねど猿（ぐう）

ちくはのもうきあのれ（これ）遊（あそび）ちて。さうぐれくぐいこん
しまちてそぐれさうこんのぐうつぐして。
くうあ治（ぢ）よう。あの文（ふみ）ばかりてくうて。對（つい）柳（やなぎ）
ちうくくうて。對柳（ついやなぎ）
の富響（ふうきょう）めぐく。いうぐくなる
ぐとのう治（ぢ）よちうてなうくまう
まりけれうう。暁（あかつき）うん（む）のうこうり治（ぢ）れを。
うちれぐありうう。羽（う）うせをすりるやううて。
ありうう。年月のゆくあもちぐがち
をうりぐくちうをうけるつけていこうろ
ぼそくちん。ぼぐく老（おい）やまうれとうあひとうあ

三日がほどいふ(涼)ほ院ごろまでも、あるじの院(涼)ぐるまを
いとあまたくめぐりて、法(涼)師ばらの
うへもこころやびをつくし、法(涼)心
ありげなるわれて、ふるまひをそうよくへりくだり
けることもあるまじれど、まろぶくちく
もひのて、廿三ノ
まくきけこひそ、うみ法(涼)師もろ
ちくおばさうれど、ひとりのほども、法(涼)心ノ
いとらうげなる有さまを、法(涼)ん
やひこころ、名は、廿三姫

ちりこおもすうちもいつとけちされくてき
して、ひさこちこわびのう、法(涼)ん廿二ノ上のう
ごとうのへう、法(涼)ん廿二のゆう
されてうひおりしおばー出家う、法(涼)れも
のこみしのへびうあうしくびをーうちふ
ことなどいおるまじくおばとおもふと
おりものくもえちさされ法(涼)れとこまり、法(涼)ん三日が
程に我だれちくけうもちくさもちくの話
もあこちこ、ふびれと表ありれでどもちど、
いよくこここーめさ也ん打ちぬてー
ちよこここうこびよおうー、法(涼)ん打ちぬて

ろづのことわりをもて人をさとすべきぞ。
わづらはしく心うるさくもあるわざをこ
そうよ。うることもものぜ（ず）ければ中
納言をがそばへよりめうしをしく我
（原討）とあだうちいことうとゆうてんかうれ
しのとぐえあんこそ。がなどもこころめうん
これまさとして枝流（牛）よこころめうんことと。
さびさびれのへくれ心のうちうちげうず（ず）
ゆくさて。（討）ごろのれ心ちぐさうさぐめ給
ばごろをまもて。とうもちるもひげる

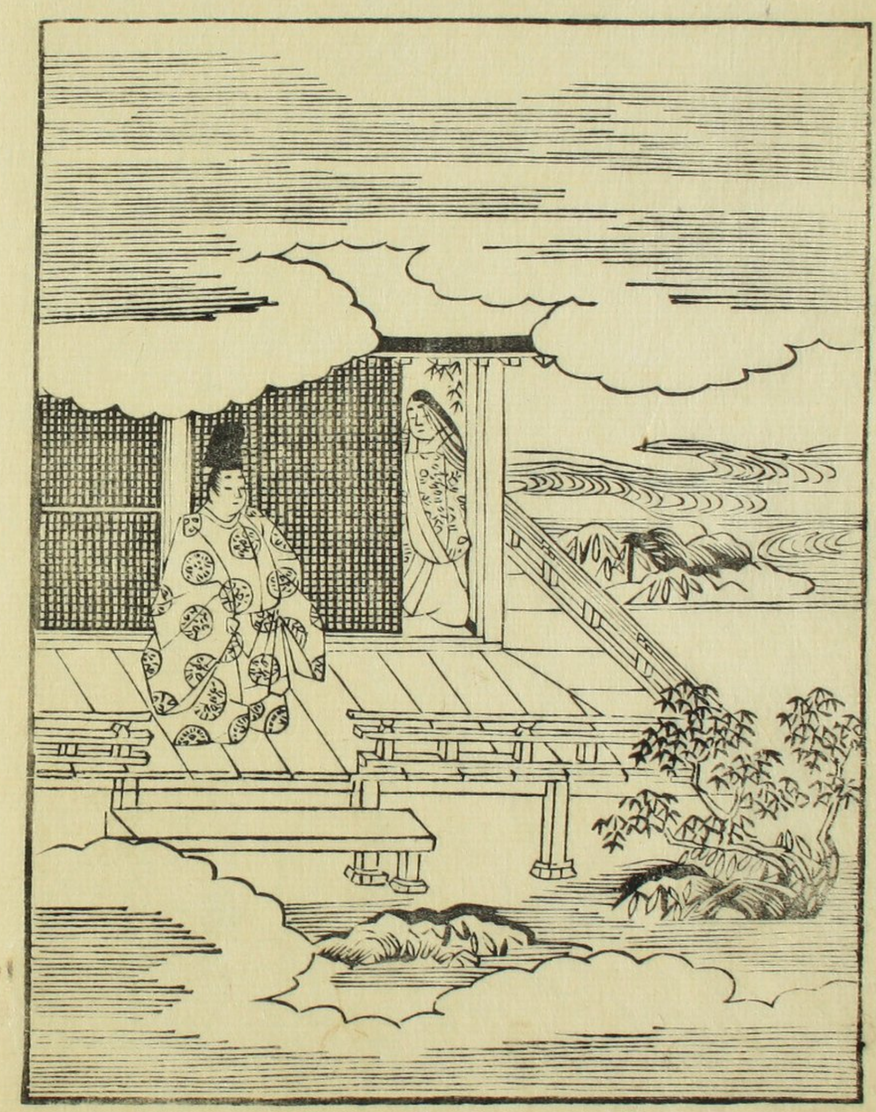
とまうべきるうくいうみひげようちるーめへ。
（ほん）ごろうえばしめうて。うづえをつてうり
みのれば（悲）祝を引うて
（悲）めうちくうつれ
（ほん）ちくれりうる世中をりまる
こめて。ちるさることくちるさまぼ給を（涼）とりて
（涼）命こそ西先絶（こ）ちぐめちるれどげよとくうて
（ほん）中の契（ちぎ）をとるもえつうりのるめを。いとうる
（悲引）うるうりぐれと。（せ）そぐのーうへいおう（涼）
なーうるねえずるのて（文三）つうり給を。（悲ノ）こいぐ
ーのもうるねえずーぐ（ん）ーべ（様ちどのうん）やる

あんとやひこそでも今てとのこまてもるれ
給つ・さこぶうまこそもうちとけゆくするよ・
ありくてうく世のそてうこもなれのるめくと
のいでるめるよ・やひこぶむべき世の有さ海よもわ
らざうれば今うは(なカ)もうろめうでそてうう
めう・さこそつれうくまぐ(へカ)ふ
人ぐも・おとそぞうめう世うおまう(なカ)ほしまふ
やうられど・いづくもうれ(なカ)るのれけるひよふ・
くうりはぐうさ海まてうまへべこそ・と
うくなぐうるもおれなをしこそてうぐうりうう
有さ海よ・けられてもうるうぐ給ぐ・まうとそてもう

ちるさこそつけてもやすくのあんものつも
切り必ずづくりそこくぞこるんうなのぐ・
そのぐうちうるらひるげしげるうを・(笈ノ折)を
こくぬやうよふとけうひおうくぬ給ちぐ給
つ・我みうるまでおうみ(ん)へのくぐるぐつひ
やひうもそこくこうとおぼしてくこれれ
おまるもれしぬめれど・(浮)ろよるひて・いま
めしくぐれうるはまもあくぬるれて・
さうぐしくぬぼしくうよ・このや(芝)もうく
つうるへくそめやをくれおをつくふぐろのうもめ
まやあんとれも(笈ノ折)むつびそてあしまぼしまう給・

あいさつ（挨拶）へどてあつさ風よ。人どやうりなさんと
すゝんひさうそ程おそりざ風ある人へまゝそゝで
ゐるざそゝぶつゝもをれづゝのでうワざされ。
うゝげるゝ心ぶつゝこされゝともめれだいつゞで
心をれをゝゞともんそもとのゝまへだ中務（添ノ如シ一元）
中務のえもどやうの人ゞめをうそせりゝあまり
ゐるれそひやをうそどいつゝみべゝ昔（添ノ如シ一元）いつゞゐゐ
さ風ゝつゞひるゝ給ゝ中務中務（添ノ如シ一元）どもなれどゞゝ
びいけれ方（添ノ如シ一元）ようふゝりてゝこれ心よを笑ゝうゐあり。
（添ノ如シ一元）ゝをれうゞゝうもいつゝよおゞずゝん。をとうり
そひゝうれうへゞい中ゝゝうやするさをるど

をもむけつゝとゐゝひうそゝ給もあうをゞ（ゆゝん）
もうへゝそ中ゝゝうゝれ世中もいとつれ
ゐるさもれをゐるどそゝうゝれゝはうひゐるやまんゐど
おゞば也。ゐまり久ゝうさよひおも。御ゐるゞひとや
とゞあんゝゝうのやゝゝおゞめれだゞば
ゐゞ風まりめれど。げゝうゝびゝうさゐゐく
へよけうもゐをゝゞるゝゐゝゝれどゞう衣
すまのれ剛のゐりをおゞゝゝゝれどゞう衣
もうれ給てゐ。ゝゝゐるゞゝ世のうちよゝゝゐゝま
ゝうゞゝ。ゞ多までのゝとゝ
ゐるゝうゝ有ゝ風ぞうゝ



まりて、ひとりやまゐくらるれど、心やすきうへ
ゐのひめぎみとさしむかひてこそうちめ
むつごとなどもよそうしうちなれ
れ、西やとおぼせ、院よそ
おもへこのごろぐりけくろもんとそをどえことを
おもへぬをさはおもひしことぞうへ
こづくりそひつづけおよ、女ぶもそひやうちもされ
心うもと、ふるへぐり給ひけ、何のやうりおぼ
とのごもりおそせおもて、ふのかた、よりおこされ
給ふとよそづくりもてなしもてなさはおもはれど、れ筆
ものひさうつくろひてそろさうこと

ひさのあも宮梅こつひ
ぶうりもまへのて、へめて、司のまさ
ちくおつまゐ、そろさこのさやどてこ
まさうりもつ、友まつゆさ
打ちりそふをを御(おん)
紅梅(こうばい)のすゑようちるさ
ひさくくて、ふをしてあげてちぐめのへふさ
長うもうう人のおやて、そもさくろおとえ
給ひぬ、つうちる西めくしさ
うう行あうそちれべうりのて、ふぶそこを

（三）

それそうそれそうそれそうそれ

なべざま(ほい女三ノ秩)
さふもものさわり女(ほい女三ノ秩)そいと
まてれこうしひるとのくと
うりうこうよこびもちくはもりすさ
れほどこうてのとれそがた
こくよそぢちどもしい
ぶこひをあやちしてやう
あくり院(条)のこどはおつまするの
れざえちくおつまするめさゆくくこさうこ
これおくすぢちはこ
人よまさりあくるをおどそくあひこ(芸を)あよし

そそのひうん(注三)こうはつとめこ心と
こくしをとうもうちめこ
うしずこまり給(芸ノ秩)そいつくし給まよ。ちよくとうび
さあひてれいつくちどをおばしけうこと
いそのちくうちのこまひ
(ほ)
背の心ちうしうばうこそ
世中をこれさ(ほ)ぐよさうひちぶこめて。とあるを
うちも。さけこうこさもれりうそ。
そりぐこうそうほうのあいい
いくあくまはしさほぐちうしとおばをうと
(芸うう)
さしちうびめぐれずこまりあくるそぐろうと。

ありおさうさ人のそ
すんをつこうくばゆ
そのあべくさあやあんとぞ

そむこうこの世よのそのやま
せこがまくやとあり
をうそこをうこまのへとて
給ふくりへんうぶてうそ
そくくしく向白うそ
そぶそうをのべて

（女）そむく世のうらめしくいきりぐさほど
をさおそけなくもれそおどやうぞおありし
かのさうぞくはほそちがさくへてみをあふ（笠）
ちどのいとめでさせ（侍）給ひんじてあるごとも
さづけるあるよ（女三）いとかなくてこし給ら
んこといとゞうしろめたうおぼし（也）て女は
更衣さちなどをのがつくれのみも哀あること
ちあんなりけり（脱）内約のんのさまは故（四条）さいの
宮のおりまゐ二条の家（女三）ひめ君
れこををさて（脱）ぶれ給ひんこと（脱）ちうどもそうけり（脱）おまなちんとおぼし

うれど（笠）さひさまやうに心あはさ
ーといとあはて（脱）やうく仏のみこと（脱）ちどいそぐせ
うふ六条（源）のおとゞはあるぞのこゝろおぼして
やうこれおうれば（脱）ぐしろもえぐうくいる
うんなりよ対面おんん今一夜（宵）あひこそ（脱）そのそれ
こともさこしまほしくのこゝろをうこと
ま世のさこゝもとぐうりのべさ（笠）のほどよいと
ちーげうりー世（次ページのすさはぶ）ちどでもおぼしー（脱）平ー家
ればうびようこゝもひけうを（脱）うのど
やうよ女のて世中をさひとづまりおんんれほひの乃
は有様いよくゆーく心許（もと）なけれおうまでき

こゝろいなばしるべ方のれとひろ。よ
つて。表ある海よつれよ。脚
べきれおそひるれば。
ろ。給。脚昔ようもこゝろ
ろくらぐ。よくのひそて
ろこゝろれけそひそ。給。添ふ。紙。びさろて。音の
中納言の。のまもし心。
の給。投人。中納言。のせろこゝろ。づ
よそて。ろくく。ろへりてろこゝひ給。
人づてる。で。投ぐよろそそすべきよろん
ある。さりめべくろびして。ろぐくこのびて
ふしんいまひさやうのありさも。百をさ男のほどこ。

なげろけるず。このぐべきこゝろれぐそこゝろをみ
人こいまく給ろぐ。投ろこゝろようさろ
やすくるんとの給。んの。脚
ろろよつてても。昔ようろ。添ふ
つめろさぐろのこてよ
さそ。いろろ音ぐろ
のりろめやうさ。心のと
ろべられとうち歌ろ給ひ
ようとのこゝろ。いろ。添ふ
ぐよ心ろく給ろめこと
けよそむこさ給められこめろ。

河。表山ろろ。

われど・おごり・しるもあれば・今もけぎ
やうそよまりて・ふうつゐまさる・
うへしのべさうやとおぼし・そうて・ひさしく
ぶれもりをのべてまうで給ふ・東の
院は・ひさうまつひと・の日びごひて・ひさしく
女はけうを・始さはじさまざれうさうねむ
つとおもひそうちんひうちどけぎやうもつさえも
びんちさ我・我のちよ・ふへ
まもうくともしさうをじと・ふとうくろろ
げさうし給を・御いさうもさうめおうりをおや
しごこのて・さひめうを給ふもあれど・姫文のれ

ことの後いかがすぐさうのやうれ
おぼ・そうへぐうる心そひて・ここめやうまそ
おうす・その日いさん多へも・浦り給ぞ・れみうさ
うさし給・さ給ちぐよ心を・へて・さうし給・ようひ
さそて・むつまうき人の限り女人ざうおぐろ車の
音おぼてやつれうまそつぞまふつづこのみ
しそれをうそてまふうくつうおりまも
さうさうさめうまゆれいおざうさのそおやさく
いうやうまそうまうまへどおうし
やうそへーをまんちうびんちうへとそて・
あれざうさひのぐ・そいれをうれほ何とまふ

ちぐさあて、ぐさもくさ
昔のおもかげさ心ちどい
ひろくてのへ(野)ぐくおざりむ
ま(ほん)されどよろけひろ
こころおばろけるめれ
すくうずひんぐ(二条の后の歌の引用)の墓ちまけて
るのひこまつ(ほど)すへをうて
るめられだいやう(添付)ひやう
年月のひもをもまぐ
ちひよぐおばめこい
てのまに我いくえひ

ふぐあぐ表よ
家のうちの有様よさもう
でうよ。をいぢうがまれ
まちもん。昔ようう
招もれう。(あのさじ)れをうて
年月を中よ(つぐ)備て(あこ)
おつうちぐぶう
洞(脇)のこさめぐさ水そりの
ちくく絶(こ)ちさおぐうけう
をおぼーいづるもられよ
こともおうーせのこ

今一さびの對面もあらもがなと
もとゐ（ゐ）もとうりぶくろ
人のさゝやきぐさ世中をさひそそ
るをやく〳〵おけつるうのとまれ
つ（ず）敷もるくおぼ〳〵あるも
れど昔おぼしそれ對面
うめ心ちもて（え）心づく
らうく〳〵つうそうて一うるめ世
のつまをも衣（ぎ）をもひうぶれて鉄（ぎ）さゞら
そ地〳〵おそうそうぶくほん
ゑづく〳〵衣（ぎ）そ（ぎ）おけゆくもとにおりそ（ぎ）

おけんをもつ〳〵おさぶけの
ちざうのこもいくうちうる笑こそれちや
ゐて名おうすめる物（もの）のあさ（さ）緑（みどり）るゐ立（たち）音（ね）あぢの家（え）
ちおる〳〵ひびのくちうえんうと学（まな）ぶ
月の預（あづ）るけう打（ち）そのあ
あるれる地（ぢ）ぶる中納言（ちゅうなごん）のあ
まぶ（ぶ）〳〵おけうる立（たち）そ（ぎ）
深（ふか）けんあるう打（ち）そうあうそふあひよこそいう
でうこのぶいうちうちうあうそべこそ（ぎ）うおくいぞ
ぞてうそ〳〵やすひうそ中納言（ちゅうなごん）ざいうそ〳〵学（まな）ぶ
日のうやうそう（ぎ）〳〵あひぶをくやくゆち

すれさ夜のそらくもりわびしくて
ねどをもづくづくねてもさすがまして
つまずばゆれいざうちもなぐさ
まりもの一ねいざさん吹(ふく)やびんと吹(ふく)ろうて
さそふ心もあれ秋のくれ
ろぐさ心をつくすなみだ
こひ出(いで)ぬおもひ(ほ)くさ
ふけるのそらあり
ぬれをぬるえまくらをさそ
かもつまおそろくつまれいやうく(ようよう)

あぐりゆくまこころあはこころして、らうのとなれ
車さうをさう人ぐるまも思びてこけげろさも
人めてこれ記(おぼ)ろうさ一枚ねこまへう
ござやどれ旅浪(ろう)といくばーひびてろう
おのくるを心(中細なえん)ろうまろ、ぬぎも今更ろいと
つまくさ夜ぐまこのひこぶれのくるろ、笹乃
げいちをもげんちもまことの別(わか)るぞみど
やろろうずるのちこ



いとつれなくもてなされ給ふを、（脱ノ）
ゆゑなきことなどいひ出でさせ給ふ
ことなどありて、いとようくつろぎ給ひて、
後のことも人へらず
思ひ給へりしかど、
らひは、つゆ
いりもえ入れたまはぬを、
ぞらもえなんと思えたまへ
ありてをかしう
も心ぐるしくおぼえ
ばかりけるみちのくに

ありさまを世よりけて哭給ふ（眺）の君のおもとも・まろ
ほすべきわれど・いとうしろへのこともまさ（栄）うもあへれば・
（添行）まかまほしう・ほのぼのとうちする・つぐひとめあるを
ちん・ほりあるうちすする・つぐひとめあるを
まづくもてくしてうまいことびもとくろくろひ
ちそそ（添）ぎうちつつものそして今めくをも
おりて御乳・前を今まあくろめくろへのほど・中ぞう
ある男のくあくろくとて・さすがに泪ぐこみ給へる
ものさのいとらうたげなるを（添行）心やすくめ
ばれてさこそくろひされ・ぐおのくろひきつこ
ぐとてをくへくまかへ（隣）あるべくもあくり

きこえおとさうずるよりほかにそりあれとそ
ろげよりてろとりおきてまことにおぼえのう
ほぞ（添）ぬめり・女三の宮の北方よもとくろえつくり給い
ぼ・添ふらんへさこそつかはしうーろそもそ
ばーそめをいうーろそもそ・やそうず
こさこしけろ・ぐつくろ（女三）ぐうちろそもそ給ふくろば・
女三の宮の北方をさへ
そおろさもまして心ぐろくろ給ふらひる
うけくろさてあそびぐろこひこさてあへり・
そうつぐの（源氏）方いうちもへえまで給ふず・れいと
また所ぐろれが心やすくろひうまへろつ（吸ふ）さば
ころよ・つとくろくのこおぼーそう・夜ごろあや

あんなど男に結ばれつゝ（廿三ウ）
さこそんとおのゝ人のゝ（添ウ）
もるべくてそいそゝ
あまりそと、うまう
ゝてまへとおぼ
ゝおゝいされんもべづ
の給うんを心べそんも
墓（紫）まはうゝでうちまもれゝん
よりうこの人やいあるべき、男の君のまもうもさ
さ海をこそさきりうむべうべゝあおぐ、ひ
でけれそうちなべ給（法）まひなぐするも。

（紫ノかミ巻ノ七）
そのづゝあうとも、物をもうこさすぢのこうく
あゝをさゝがひづこまと（添ノ紫）
こづゝぞおぼゝうて院（紫）つりのて、安（紫）女れ乃
元おどのれおりさ海どもなう（添ん）ひうもおりするも
れと、さ海ぐこをりのへるれ光うれゝうも、
年ごろのおれのへる人のおぼろけおろんがいと
うくおどろうべきまもおゝあをよ給（紫と）ぶひるく
そそくこのみおりぐ（比）こととおりうゝおくべき（添ん紫ノう）限
けうとうぢゝげまくのひうるそひそなか
やうまいまめゝくおひ海めさうろ、さ海ぐの
くりもうおうあ（紫）でうさうるこそ給ごぞ

よりことしいまうみも、ぜひ
つれもめれぬ海のまつまへを、つぐく
もおりくんとおぼえ、うちとけうつれる翌日を、
祝のまつまへつれぬへれぐこうけのてひさ入
しこまふまおぼれいとつぎとこそ、ぜひ
らくくうけつげようさのへり
出もうけろひまうり、とまめまて
水島の春ぶいまめまめと嵯のまつまそ
気色こまれおぼしまうさそへうすきひ治まる
あれて心ぐまこされ海色のまつまけをのづく

ありつこゆるを、ぐとまへるも、有ぐく
衰は、おぼさう、今和いつぐるまれいと海ありぬ
べくれが、捜母びすく、いとまりまうて出のまうり、
いとあるまぐさまく、いうぐくおぼしへすまも、
うちざうう、書ぞのぐ方のぐ、ぐちのまぐ、ぐまうも、
はれるをいむつまうれこそてのへり、
いとうのうげまおとあびまりのへうを、心陽ぞ
うまとこまり給れ物紙なぐいとなつくく
実こまて、申れとあけて、ぞまも射面し
まへり、いとおさうげこのこみえのへバ心やすそ、
おとれくうくあやめさうる海、昔のれまぢ

をも（これ）男（女三ノ条ノ条ノ）絵・中将（女三ノ条ノ）のめとくいつゝ石（め）ずて（陸奥）おな
ど（ど）ゝ（ゝ）をゝ（ゝ）ゆれ（ゆれ）ばう（う）ごけ（け）ちゐけれど（ど）・ゐ（女三を北人）ゐ（ゐ）ゐ
（ゐ）ゐ（ゐ）ゐ（ゐ）ゐ

ことにひあふれがごと光りて、墓
のうへ（院）のうへにおほひつくしたり。これ仏ぼしつとこのう
びのやうなるはなをもちて、すでにをどりあがり
のひけうを今すでにうしなはれ心ざし（深）くてもも
まうさんを面をみれよつけてもまうやをクーぜ
ふんぐ（深）あるよくげをくさへささしうもて
のへぐ（深）ことをもちてめやすくちかけ、神主ばし
墓（深）のうへ院（深）のれ堂（ざう）にて、薬師
像（ぞう）供養（くやう）しなり終いぬるちよ（深）いさゝあ
とのへばかのびやうぶ一重てさう。仏供（ぐう）
ぐらく（ぐ）のごとくのへまつりの極楽（ごくらく）でやうに（さいそう）勝

王経（きやう）金剛般若（はんにやきやう）等経（きやう）ちぐ（深）いとゆゝしくせられ（深）ぬるや。
上達（じやう）ぶつことなりぬ。そのうへの夜（よ）面白く
いもんろちく。御紫のうへ（深）いさをひのべまつ
もぐめて。ことあれちるよ（深）うへいさをひのべまつ
のふちべし。おぼれつるわ（深）ぜ（深）のまくよ。馬
車のりちぐ（深）ふをとちばくやう
我もくとれ（深）うぐ（深）のつあしくもさせのふ廿三日
をれ（深）年（ね）の日よて。この院（深）いうくすさ夜ちく
つぐ（深）ひうまへうちる。我（深）れつるの夜よりばぐ。
二条院（深）そのれまうけいさせ夜（深）れさうぞくを
もぐめ。ちるのこ（深）れ

志のみをれ方ぐもうべきことぶけて。のぞん
つうきつう絵。毎いどの人の爲ごうもろをも
らひて。爰ぐべ詠（ちょうだいぶ）おま院（ぐわん）目もべまでのまうけ。
いうくをき也のへり。もん爰（ぐん）のもちぢいでを。
何のもうくひて。らてんの倚（い）ますてうり。おとぐの
雨のまれぞのつくおもひ十二ふてく。爰冬のれよそひ。
れみす爰おぐ何のぐくばのおやのおはひどうも。
うつくこつくりて。うちの心いおくもうず。
おまへまをき地のつくおろ。うのらおすそ
ごのおひくうぐうの基（もと）もげんのりそく。
こうものを。銀（ぎん）の杖まおろ心ぐへおぐ。淵景（えんけい）舎の

れおづうて。おくの方のをきせうまへる。ゆへ
おく心こもり。うもろのれ爰風（ふう）招（まね）も。或（ある）文
もんをき也治け。いうぐくひうて。前の四季（しき）の絵（え）
もれいぐめづくをきんすい。淵（えん）おどめもれぞ面白
しかのくべこをつて。やきき地のこづおろひ
そくれでうぐぐも。れいのくもり。ろもこの日さ
しこ。ふ爰（ぐわん）左右（ひだりぎ）のだ。或（ある）文をつめもりて。
つぐくいまして筆（まう）絵。基（もと）もめのもう。辞（ぶ）基（もと）もん
きうこ。ぶ人（ぐにん）のひくぐうちて。まひんぐこ。ん
ぐき八十ぐ。うくのくひつ十つぐそそそう。
ひけぐの時ぐうこ。ぶ人（ぐにん）まいろまんざいらく。



わうごやうもの(まゝ)ぐ(まゝ)事て、日言ふる程よ。こ面のらん
ふやうしてらくそんのまひ出ふるほどれつゝの
めるれぬまひのこ面あれバまひふるほどよ。指
中納言(相)清つ時ありてづりあやをはのこまゝて、
紅葉のつげよ入めるみ折。あるずりうありと人ぐ
ばしうそ

ちゃくいとしめしくちゃんありけり。そのおりしも
まちのそんぎょはれもうでひるどきすぐるよ
ころまうでずとどまりの禰宜やうやうよる
らんて。ここちよけれこそ。
空位。まうちきんざちどく。こぐの参どんよいところ
ばそちがーこそ。こぐ
きうでく。恨ちゃくこそうをつてもえこそさおびれ
そこーちゃど。放参籠のかた
こうも。まる衣よちゃんみうこそ
恨いこれ
物絵こそも拙こそもをかうこそうはそん

でけるめれど。いとうさこそ。こちるさこそれありう
ひのこぐもけ。そぞうぞくあんやうちまい
物ばーそめてーこそ
まぞつけさせのひそげう
ぎく給けうを。この中納言
へんとそーめて。供
笑こそ給物うこぐもの門院もうびそ
いちやさ心ちーばうちとひごよ給うこそこの
まちゃれどくひちけめそ。ぐろへこそやうよ
ちちーのくれど。ぐふいちをこぐるこぐるこそ
まうて。ぎくの磐ちゃど。穀倉院うり。

つくうまつるをのへうゐ・さんぎちゅうなごん・おほやけごと
まうして・ないちゅうはう・宣旨（せんじ）かうぶりて・こころこころよく人だちのおもく
大納言ふさうり・中納言ふさうり・参議（さんぎ）・院（ゐん）のうりすくねなど・おもしれでうどぜうなど・
物ほさ物（もの）ぐ・そうまつをのへうゐ・冷（ひや）ふい作ぜあうて・ひる
うくわざうさいのそうまいうのへうゐ・院（ゐん）をいて
おまへよむうへて・おとど・ぜ（せ）つさのおやのかまやの
まへくまくふとうて・これおとど・ぜ（せ）で・今さうりの
まううくまくとは・こしのへうゐ・おとどの院（ゐん）の私いて
つき源氏のまうよそ・落（おち）葉風（かぜ）吹（ふき）うち・冷（ひや）の

ゐるをものへうゐ・うつくしのあやのうすぎぬうち・おとの
ふのうへ・ぜうちゅうなごんやいかをうちゅうさん秋の
ひうちふちぐうちも・ごのれ葉風のすさつきれうや
くさまは・めもをよぎぜ・ぞひまへめでうく
ちんありけう・主殿（とのも）のつぼーひさまれ物ぐ・
義人（ぎにん）ぐうり・ちおのれいさほひもいて
つあーく吹（ふき）落（おち）よれ・うちそへて・ふ作法（さほう）
いてくちうり・ゐ馬空（うま）すさ・ただのうづさ・ふ清涼（せいりょう）殿（でん）の
ぜん人へ・ぞうつぐくまひうさてのうち行・日うれ
そそめれいの万歳（まんざい）ふ楽（がく）・皇（こう）ちぐ・ふ舞（まひ）・紫色（むらさきいろ）ゐ
まひて・ものへうゐのへうゐめでうくまて

もやしのくられおそびる。れんしんを
びく。例の普茶(ふちゃ)を家(うち)なるもせるうるさ地乃
ど(ぢ)ほかりて。つとよる(添)
おとど(ぢ)和琴(わごん)ひき給(たま)ふ。
くのさくあるまやいと
れ。さんもれをおきくうう
れどもいづ。音の出物(でもの)どもいでできて。つまもる
うれおるくひるいづるうつけても。さて
うひめべきれむりちど。ゆうくまて。はうさ
あまるたびありて。地の西白(にしじろ)きもそ(ぞ)こ(ご)ろなくれ
ゑひるさどもえとくめ給(たま)ふ(ぶ)。れ(これ)をうりまれ。

ぞれう和琴(わごん)一。このさ給(たま)ふ面(おも)白(しろ)くて。さうん
のくこひとくうろひよ。うくのの(なべ)ん(ぬ)だ。こ(ご)のうの(なか)
おぐいれて。れ車(くるま)をのそなれるふ。れむまどもも
むり人(にん)うて。古(ふる)のうさどもこ(ご)面(おも)のぐくてのく
ふう。六ふの官人(くわんにん)のうくぶ。大(タ)れのふ。れ(これ)心(ぶ)とそぐ
ありてうあうさくもけ。ばしびとくめ(ぶ)れど。
問(とひ)。芸(げい)亥(がい)一院(いちゐん)。新(しん)古(こ)今(きん)。名(な)ぐ(づ)けうくのれゆりうくくさ
行(ゆ)。ひうぶうこうるれば。れうあり
まれでくちんおぼし
おうするをうぐ(づ)くしけ。大(タ)れのさ(ぶ)一(ひと)うくろ
おまうの人(ひと)すぐれ。そくうもうう

ちゝやうこ抱しまゝ給よし
家にて母との恨みくのこと
もくせどそのもを忘ることもあり
けるその日のれさうぞくうへ
ちんしのひけ裾どもも大ろのことそで三条の
家小方もいそぎ給めりしまゝ
いとゆきうちくの抱のさうこをもこちろこまか
こぶうそのことのつゆをおこと
つけてなどろもおくこうきぞまもまぢくひ
給いまとおぼしうをたねの去のれゆりこ
いとうくずまへられもへうさうぬさうを

つぶのれろさちづき給めうこうと正月朔日より
まぢうみぶんうきゆせのふおくやろく社くのれいのり
ろ我もまこずおぼんぶの去ゆくまつさことをへ
てふぶうなどおこと
ぶしまうをせこいのうへちどのさうこともる
まもぬいくちおしくさうぐもう抱こうれく
おぼさうまぐいとあえうれぬぶこいうこ
おそきんとうてぶ二月なる
よりおやまくれ色うてちおこうおぶうろ
どもさうぐべし法師ども京をへてけく
しものべくされがおのこうれうんも

ものつゝそて。みのうちの中ゑ
基よつゝをもり給ふこゝろ
あさいらつゞをもんめぐりてありけるに俊法(こぼう)の
ぶんのまもるめりて。いつゝしきぞんざいけどもて
のつゝろむ(昭名)ゑこの時ろ
わざもあれば(昭名)いつゝしき心をつゝ給はゞ(昭名)尾ゑも。
今いこよるさわげべくそ(昭名)ありけるつゝ。(昭名)
さ面をこまかい(尾ホノ)等の心ちもて。つゝしうと給り
ちづきもれもろ。そ(昭名)ゑいこうそのさま
らひきへいし。昔のこゝもまでまもるつゝをもて
給はざりけるさ。(昭名)おまゑ(昭名)ろこびまえうへぞ。ありて

ていつゝと涙がちよありめつゝ
出つゝろうきつゝも。(昭名脱ム)和つゝる
さ人れとうちまもり給しつゝ
ざろいはのつゝをさきみへ
ろ。む(昭名尾ゞ)まれのひしはどの
浦よおりつゝおうつゝろうしむ
のぼり給しつゝおれもくいと
ざろりのおろうこそいおりろれと歌(尾カ)うろを。(昭名脱)
ゑのくひきそけのへくれいつゝく
ろつゝきつゝ。ほろくとも(昭名脱ム)ばけよ(昭名)ゑおりけるく
昔のつゝをくろうきざ(昭名)ろこまつゝびおばけるく

七日の夜うらうらもれいづるひのどかなり。
寒霞院のく世をすてゝおはしまされうたまふ
るや。院人ども。弁。宣旨(せんじ)などまゐりて。めづらかなる雨
ふりまされり。禄(ろく)のことなどいとまばゆげなり。
ものやけごとなどいふうちもまゐり。つゐにくさゝせ給ふ
つぎ〳〵のことゝもの。大臣の家〳〵その次のひとゝもの
まゐて。我もく〳〵とそゝのしりさわぎ給(たま)ふ。
おとゞのゝもこの夜のことゞもは。例のやうにはあ
らでそゞろにおそろしきまでひびきてとゞろく雨
風のまぎれにも。ものゝくづれおつるおとなどの
つゝまべきやうもなくおとろ〳〵(驚)しきを。

てもうちふるひ給ふべかめり。
こひつゝめのうち(つゝ)むつゝしげなるおうなどもの
いづこともなくいでくるものゝさゝやきあへるもを
なりて。いかゞせんとおもひまどひをり。
故(ゆゑ)宮の宣旨(せんじ)のすけ(陽)のきみまうでられ
むとゆふべ(昨)ありしものを。いと夜ふかくおとろ
ことさらのやうにおとなひたまへり。
朝(あさ)ぼらけをまちくらしかねたまふ。
教(をしへ)ごとなどくちぐちにのべたまふ。その
ほどのぞ〳〵しきまでもの悲しうおぼえたまふ
なりや。六日といふあれいのおとゞ(昨)ありまゐり
給へり。

えも。つゐをねるくいぐるさまりゐて。夕(ほ河)ゐるのあまさ
まうけるをゐ。今までそこをめがうゐーそこよ。うく
らうさんをそへなりうそ。ほいぐりりゐや。ほぐるまれをのさのびる
やうゐ。おようすけそうまれめとるぐ心そくめそ
そるめそで。そゐくよ中そられ心そぐれそる
ぐりそそりて。つうまうをゐふ。(名)れうそのれ心
そそてのらうくそくげるくゐはそもゐもの。
そうべそるるはひぐそてりくそうそもうけ
ぐくめゐぐをはめのひそ。りくる。こいのうへ(笑)いまは
そもぐそうゐ(名)そうてのそ。さぐうゆそくそて

そうくうぐ。今いつ(笑)のれとくよ。うくむつまくく
やんぐるくゐぐーぬよ。うう。ちぐうのくそ
のふれ心そて。おまぐれちぐれるぐくしゐ。
りおうするも。いとつくくしゐ。は(笑)ゐれうづ
そるそてすぐーゐ。ふこぶいのまぐ。ゐうつ(笑)なる
えそろのぐうるそをくめちん。おうぎそしけ。中く
そりそめて。ふそうまぐうそ。今もえそうまぐう
めう。ほ(人道)あーるもうふゐ。ふそへそそて。
そうひぐるもいとくそしくれば。いつ
ちんぴせのそうひをそうやすくゆさそちるべそく。
ぐーゐどもいひて。ぴ家をがちるよちてゐうの

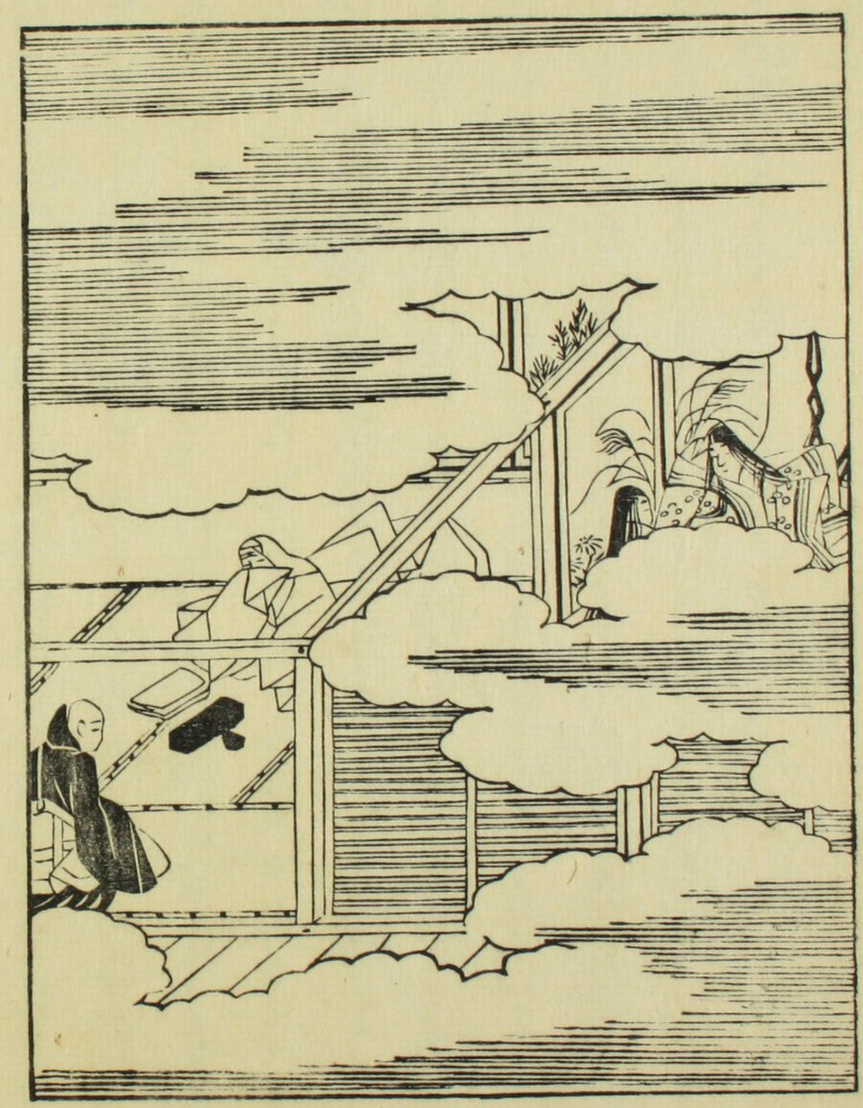
ゝ田ちどやうの抱いこれそのものとゝ志て、この
國のおく〳〵の郡(こほり)よ、人もろ〳〵山あり谷
をへだてゝ、ひろ〳〵みち〳〵ありて、うこ〳〵とも
のちまるひろ〳〵とせまくもあるべきともあらず
ちひさくすべて、ぬりものゝ、まきゑ、かきものゝ
よでもんうのちひさきこのちさきてい家ことをよろ
ざりつゝれよりぞ〳〵なく人ぐりよりけてもん
一ぐりまでも、おまぢえよさるべきおうのことを
うひけゝ心そるゝ〳〵世のこちめよりそれ

ゝるなれよへり、(今文ノ有)このそ
うちよりぐ〳〵ひけつれど、ちよりかうくちゝ分を
へゝるやうよりもよへりけゝ、さちゝるゝ
限ゝゝそゝうけ後ゝぞ、れぞをへゝるもめれ
いとまりて、念仏(ねんぶつ)もけぐ〳〵ぶいするやうよやくちゝて
もんれもゝそこもまゝめをつてよけ給(たまは)れど、
若(わか)ぢえ志ぐよ家(うち)のて、おこと生(うま)れのへゝうを
もん、ゝく悦(よろこ)ぶ給ゝをゆへ
山ぢ〳〵の分よ、今更よゝれのゝえをゝちよ
ぬぐぞ、ゝよ〳〵の年ぢ、心ぞゝちく、六はの川ゝめ
ゝもゝぐれ、ことをゝろよて、蓮(はす)の上のつゆ乃

わがひとがうまでちゐんわんでまもり、我(われ)ものく
むまれねんとそ、そのさ〻のこ月のそ夜の姿(すがた)る
〻やう、こゞ〻すこ須弥(しゅみ)の山を右のまゝげう。
山のたう月日のえやうさ〻て、世代
てす、こゞ〻心のそものげうられて、その
光(ひかり)あ〻ず、山をゞひろき海(うみ)へべそ〻ちい
さき舟(ふね)のりて、西(にし)の方をさしてこぎもんと
竹(たけ)、姿(すがた)そて教(おし)へ、げうずるめ為(ため)よ、そのむ有
いでそもの〻、何ごとも心のまゝにつけてなくいつ〻る
こをゞ初(はじ)めでん、心のまゝにそ竹(たけ)、その代
〻そ〻それをゞ〻の方(かた)へ竹(たけ)

つよ、まこと両教(りょうきょう)の心を教(おし)る中よ、姿を信(しん)ぜんべき
こと地獄(じごく)竹(たけ)、いやさかさまのこゝろのもちよ、
こゞ〻けるこゝろいこゞさもりこゞ〻
そ〻ぐめ為よ、そのいこゞ〻ねてもん、こゝろをも
むさ竹、こゞ〻このまこゞ〻て、我の信
こゝろ、こゞ〻ひとぢめて、ゞ海(うみ)よこゞ
竹(たけ)在も、ワぎをこゞ〻のむこゝろをそ竹(たけ)、そ
もん心のようよ地獄(じごく)の苦(くるしみ)をそて竹(たけ)、そ〻り
よ、なこゞ〻ひのみ名ぎこゞ〻の
こゞとぬのて、わがひこゞ〻ろをもん世よ、何吉(なにきち)のれ社(やしろ)を
こゞめこゞ〻よ、竹(たけ)

んこのひとつのこひちをせるのゆめれば
うるひの前の方十万億のくにぐにのむこへぐにてる丸木のうへむ
のぞこうるびちく此ゆめれば今いくむかしの
蓮をゆゆる程そのゆめまでこのまそこやまの雫
そひとあゆんとそてちんまりいりめろ
入道ひろうでん曉ちろ今ぞろくよの
ゆめぐろうすろとて月日うそろ今夜ろん内日も
さそろおもろくめつそひろ人のそめ亜
けろ衣よもおるようやつれのふぐ親角い衣袈裟の
もとそてちて光法一のこめろは功徳を
つろうへびろみそ
ろふかずびゆろ有ろぶろいろりゆちばゆろる
對面ゆりちんさばのおりのそろよいろりてぐく
あひえんをおぼをさそてみ社そそうめろ
乳文ぎをおぼさちろだんのみぞこよ。ゆむぐ
うめてなりのへり。おまぐ
さぐこの月の十四日ようちんぎ。ぎょろぐ。
ろれて。ろさ山よへゆめろひるろ方をびら面
おそこよもろゆりちんそこ月れをひしやう
おろれ世をもち出のへおそろうろうあてまる
對面いありちんものこあり尼ぎひをそてれ
つひの大法ようへびひ文をのて。ご日という



我为そこ〳〵もあつまでくる
中びとひとでふれて
うれしさをかけて心ざし拙き
こひのうたをのみおまぢかう
名のれとくまでうれしく
男もおもひてあるべひも
こひもとべられてこそ
人〳〵おもひすてうこそ
人をこひうすくをうらむ
うどいひせるものもあれとこひ
といふけどおもて逢ふ

さんけて年月をふるそて俄
そて〳〵そむきてせるこうて
ふり捨れてうこそ
ことのうちそのてこめをづる
ちぎせを初めちんにかく
人をも恋ど人ようせをまて
わうさどもれこそのて
がれべうこそみくこそ
こそちうさ行ちづうそて
ひと表ようちのそこ流
ぐれてゆくえのともあば

ぎもけざやうひのうへ
宿借よりはじつるてやちん
びのくらべき人のゆくそ
こまり給ふ世中もさぶめ
ひとくちんとて表まず
うち給ふ日もの(源)ふのおもの(紫式部)
てゝと俄ことひうれ
男ひとついるごろもひ
ゆるあるどれいをもう
ちまくらべきとて焼
いうぐおうまいでう

め(名詞)今こそりのそんな(名詞)れの
ばゝーむりくまもも(源)院もこれのぞ
もし世中ものやうちの
れどおまごこそ行
めりさいつまばをこと
文(尾詞)うらそそいでやされ
るさすくをこそ(尾詞)ばれそよろぶ(比)このぞくあり
ゆふ(接)もてまうのぼりのめ(接)
うーのこれが(係詞)くばしる
ぐーこそこそんとぼ(係詞)のとものそ

（昭羽）あがうえやうまめうえ
れ心をえひよ（笑）そえられ
ええばくつでられそ・ほ・ふえこのえれど拙表ふり
けられそえさどもえうえれが（添）おやーとうちえる
ふさのえうえ而（昭羽）れあーえうえそ・うれあーの
岩座（いえや）ふり更びてなーれいのりの巻（名巻）教えまぐさえき
乳（ぢん）などの伯けうをれこえろえもえーせまえべき
ふりあーばれえぐせくべきやとて伯うをまぐ
今いつつでおえて・おえ（添）沼よ・げよ表ふべきありえ而（昭羽）
へうよとえるひまえてすこのひよえうん・今下ふぐて

えうえのえうばけよえもえよふえんえ。
世中えうーあうえうええぐのへとそえる
よもこのせよそえうえほどのよごるをみえさえや
あんんええさえうえそあれいとえぐりありけ。
せえばざりりや・さをいえりみえーえすぐよ更文
ありーへの宿指（昭羽）れひざりぐちはせそすれが不
よもあーあれえーおえさの心えこれあーあせえり
えうひすえいるとえそえしーがまえて今心
ぐえーえほぐーもあえ・えひもえれよえうんをやか
やすえ男あえバ更びてえーえしくえそと
の給・今（昭羽）いへ（遠ノ）み修一更をもすえ・旬のをえそしめ

山よりもなほ高きものは人の心なりけり
ありとあらゆるものの中にて人の心ほど
移りやすくかつ定めがたきものはあらじ
こは昔もいにしへも今もかはらぬことわり
なりよの世中のありさまを見るにつけても
まづおやしらずこを抱きたるうばの
涙もかわくひまなきは人の心のなせる
わざなりかの人のこころのうつりやすきを
とりてあやとやうするおとこのこころの
とりがたきをとりてあやとやうするおとこ
ども女ども我こそはと思へれどもそのゆいごん
をまもりてこの道や尼ぎみのうそ心
なくまことあるをこそえらばめ
こそはとおもへどうち明けてもうらうらの
ありよ世中のありさまを見るにつけても
まづおやしらずこを抱きたるうばの
涙もかわくひまなきは人の心のなせる
わざなりかの人のこころのうつりやすきを
とりてあやとやうするおとこのこころの
とりがたきをとりてあやとやうするおとこ
ども女ども我こそはと思へれどもそのゆいごん
をまもりてこの道や尼ぎみのうそ心
なくまことあるをこそえらばめ
こそはとおもへどうち明けてもうらうらの

引きうごかれてそのこころもまたうつり
ゆくをとどめうるものはあらざりけり
ものをおもはれぐるうつくしきこども
をそべてなげすてつべきものならねど
人のこころばせをうつすものにしあれば
それそれの心をそそのかしてすくなからず
こころざしをつくさせてありがたき記
けなきなどひとりのうまれつきの落
すゑいちもちあひてそれむつまじく
ひとつみちをふみてひとつことをなさむ
ことはあるべきことのもとひのもとこ

そいわくありげ・涙をこの袂の
わりなくひぢくしぐれおやもこ
ころさびしげ・ありとく人もとがめまされるげ
そうまでこころひをうれとそひ
しくこの恋のまれ治しぜよちぐりみく
そひとうとうびめまく人こころのあるされとも
ばつるくこそひわつれさらばうふさ
のこまそ・おもちはのでこしりそうこ
さ面まいうしめをこうびもび人ひとりの
うめこそるれつそろまぜこころ
けんとゆうれば心のうちうりおごこくさり

治つ・添ノ如そそてとこ
ころそしもこを作んとく・女此ごは笑治まつつでよ
いまはくいうへのこをもおごりうびめ
れば・あるさの此心ぞへをもろうよおばしりすあ
もくうりうべき中・そこめむつびうりもこ
さ面の人のうげの表をもろはみひとことのろうを
あつはばるけのこまもあごで・まてろくこ
るごまひれ治をこうもちごみれろろ
ざそそぶ・くわんびまひろそこうを
いうへのせのこへまもしそそしうべうりは
そごこばれどうりくしこさごりあんも

うこそやうちれど・おやまりても・ワづこの
継母ぐ
もろこのこころゆゑこそ
ちこんこのしのこそ
こほとつこえぐこ
べ・なぐろけの音のせのあぐもの人へいこそふ
みぐもあれど・ひこそりぐつこもこ時まはをの
づこまそもをすこめーどこもあるべんめりこ
もあるまでこさこよ・うぐぐこくをつけ・あい
ぎやうもく人をまそ・心あるかもいぐうち
とけぐこくどひぐほもこさワぐこもんあるべこ
ほはあれど・人の心のこあるこ伝うかをこ

むこさをころよ・ゆへうひこほぐこうちあ
うこめそこのこころぐせあるべありこれをのく
えろろうこありて・とうこそ・ワづうもろこうこひ
ありもそんこいおりぐこもんこぐまこのこ
こころのこをもくこさこといこの蚤をのこもんこれ
そぐおひくこるろ人へいうべりけふよもん
もひ伝ふ・ふこそ又あまりひくそ・それもげ
もさもいくこちあ
人ぐいもひやこれめ
ゆこそめーはめこ

このれうちをもおもひそめてし人へおもひのびやうのかぶ（病気）結ぶれどいとあうごころをこそまつ明暮のともしらさゝやうぐ（様子）ゆりそうしてさびしらんとうまでゆくをあらめをうちつゝけてみずまへのつゆもそれがくりていまだゆくさへちんぐ（珍）ずをつゝめ男のさすがさうしめもあえさうにもいとうつくつまくゝをゆもふのへくゝをゆくゝされなりてのこれうちつゝけてゝ笑（枕詞）そのれうちうまい（病）の心ざしこのれ（姫君）ありさ

ゝ風をうち（枕詞）ゆづりさゝゝゝゝゝめありさゝま。それもまさりもちて。けちえんこちぐあゝめれもてちぐ。ろぐのことおもれめやすくちゃんひちくうもてさゝちゃさゝゝそもおもひえてひぐくしさひとはぐちまぐらつけて人のあえうさゝことおうう（ござ）そてをーでるく（泣）誰も抱し給ふ（枕詞）やうくめれが心やすくちゃんとの給ふついでにゝまふ。墓へ（添寝）そひぐーされちぐ。物のいりぐけうさゝれ心ざゝーのつゝつう給ふ（枕詞）ともいとやんぐとちゃされ心ざゝーのつゝゝゝれぐまうくゝしゝも

ぐしもろおりさ海のこ
こそうでこれ（三）衣のれうべのれうべのさ
のこめでこそて・つろりぬ
ろいうこぐけるさつざちありうう（三と略）おもぐすぢ
こ氏かうれど・つま一こそこ心ぐこくこ・そり
うぐち字活こつけてもつけて
ろぐそし活けのやんごこもさぐこあばこ海こも
あ〜ざめる世こ・まこてこちまぐべさばしう
あ〜ぐいぐすべて今いうこ（入道くう）
れこしこめりこそやまぐこをそひやうのこぞ
衣こおばつるこ・尼ぎもこぐあこれそのこれ

まこそてこやうちりこぐひとこをおこそ・海の
世こそひやりつちぐめりお多くり・たむおのもも・ば（三）姫
衣のれこをこそひをこをこぐめうもあこぐうし
ぐ・めこちくおりまこすをいこぐこもおば
えぐ・こうこのれうこぐこりて・（三）こちこ氏
こりめぐさおりくこまちれをれぐこけこひ
有松もこ字活こうとつくおばとをお多こ一こぢ
こそ・う人のぎこさいのめ〜くせのこあ〜こ氏
ぐうりもそうこぐさちれど・おこくけぎや
こもれめくいこぐ・女房るぐも・おこもくく
さいすくこく・ワやこちびとれ・ひこさ

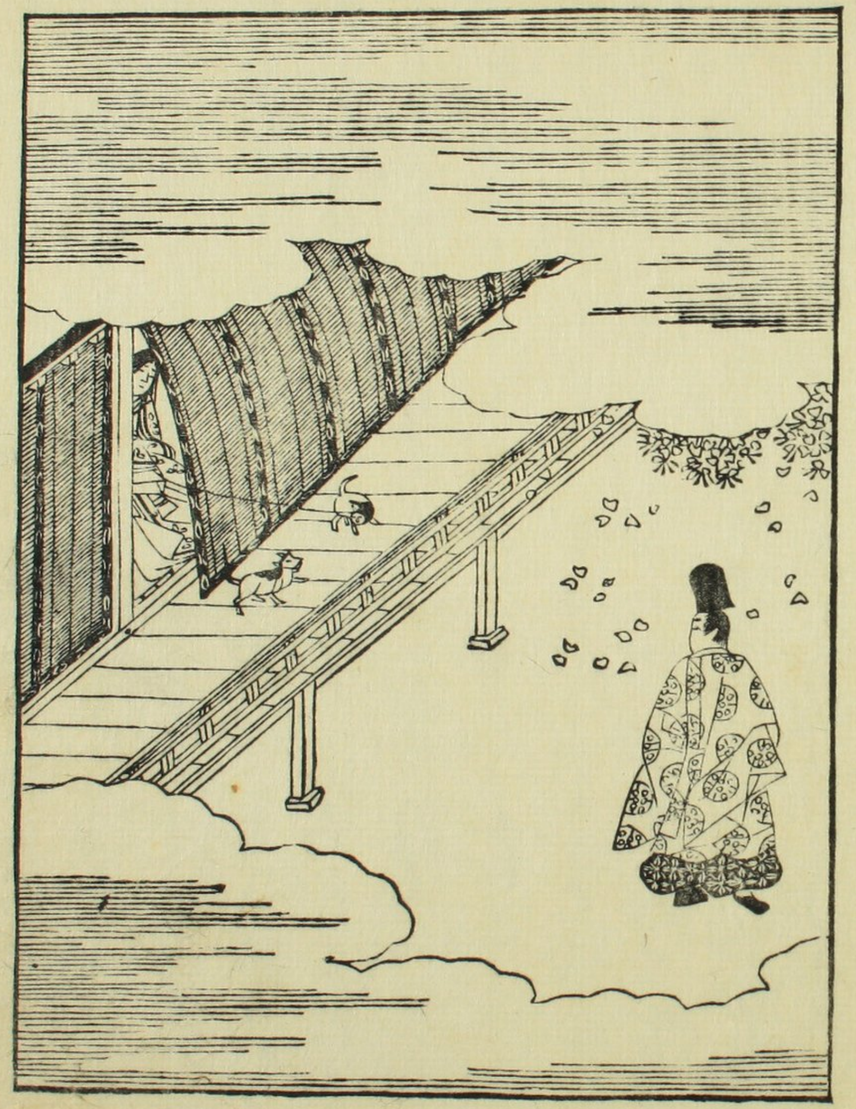
あるようちもあやござされ
きつめまでのごひさあつ
れあるうちはいひちごとも
心そびめるいうろのうちのあるいまうこともこと
ワざれば、ヲコ人もれのあそひそんもまる
さることろちゆさびよるうべきこと
もうちまでればうくへのくよひれつおなつ
けそひまてるまちをこぞ明られい
いつけうれあそびこもれは心いれこうこべ
のありさ風ちぞ院(ほ)いいとめようつばこめふことぐを
あれどひれさ風こ世中をおぼしの給まめれ

なごもればうくうをもまそてこそもある
まれーうあとのうでゆうしめ
うこのへさを給つぼ(さ)こうこ給ずこつけ
をばいとうくをへこそへ
ゑうのうちタおの表もびこそ有ぐさ
世ありうれば云のれうういうこそこのう
へめれど、そもくこもりでこ笑うあく
ちびやるう紙もそこうこうこうこう
人をもけこず男をもやんごとなく心うまて
るーそへゆくくさ(捜ちそそ)こうこ(おもひ)もごくこ
のこちん、そひ出れけう(雲ゐ)ワざれ小方も表とおぼそ

あるごとくあとうつねよこのわが庵をつみれちめ
ともつひとびまーてせ世(源)本一ごとのるるをおもとぐのお
まとうおいありてお(源ノ世ヲモ)ばばーをそそてろろるるをも
ひとおもでとようあこちひりくひりそけるこ(池)三月
ぐりのそうらるるる

猫(ねこ)いまだ人(ひと)をもとめやつかうことをねがはず
つさうけるをもよろこびまゐらするをも
よばんとひうつうちねよみそぢのとしをあげられるをとくとしの
このねのまくまありつるをとりいだしてかの
そのかをそでにもりいれてすうつうちすぐるまでねうちの人(ひと)
人(ひと)あり。もつうつうの二のまのひんでのそばに
もれいだされてあるべくおもへるこころいろ
ざいうやわんこさうまするさうなきことなり。さうけちめやうな
ねこ(好依)のつまのやうに

えて。猫のおり地のほそるがちなるべしれぐ〜のすそまで
けざやうよういとをかりみうやうまるびさて。す
そのふさやうよそれうういとくろくつやげて。七八寸(すん)ばか
あまりのへられぞのすそぐちいとくさぐやうなて。
すぐつさこのうのへうそでめ。いひこずおてろ
らうげるり。夕ぐもれいばさやうるぶおくうさ心
ちするもいとおぶくちものり。まろよ方をるぐろ
あるべきのちものへめ乳色ぜをこうかとて。人ぐおへこをおともそうけめるべし。猫(ねこ)のい
くちのりいこうのへうおもとともてるーるぐいと
おひうそて。ワくうけうの人(ひと)やとおとこうう





たゝ(タヽ)おいとうそぶきつゝいさゝれど、こゝろんも中〻
いとゝくぐ〻こゝろをえさゝそて、う
ちそゝぶさまへくるうそ、やを(おを)〻のさゝ入給、
さうはゞうちもいとゝあめこゝちし給へど、
猫(ねこ)のつかゆうつれば、心もあうぞうちるげる、
まてさぐり心をきめうる紙(拍)つ巻はむとのさま
かてゝされぐりまよひあんこゝの中よこゝろ
さうちさ澄(すま)うもゝ、へよまぐるべくもあうぐりつゝ
はけこひちど、心ゆうこゝろてばゆさゝめうかう
まてうれど、たゝまきめとぐめやくたゝわいと
ゆくばさう、つり拍(拍)ちさ心ちのちぐさめよ、移こゝ

まつさゝうをてうさゝぐさゝれがいとうだうて、
らうこゝげこちるくまもちくちひくゝそへくゝぞ、
すさぐちやおとぐめうくをそて、ことアア
のざいとうぐしやこるこゝそとて、墓乃
うるこゝものてよいうのへれがこれそるよ紙(紙)め、
家(家)もみちをうのてれ物(物)語しゆみつぐくの巻ど
べいすれこるつくぐ、つぐちるく、川(桜餅)だい
もちゐちうしめて、つぐちるくの巻ど
もこのみるざよとうのゆみどもさ海ぐて、
ぼれとうふさうべつあうをつうを人へぐそ
こゝろけまいう、紙(拍)巻をいとくちのちりて、

やまずれば、さるもうつをつけて、おどかやろ。
ちかいかもり。おやしろのもりのふくろげ。
柏の下ひ出っくやあんとも。いとも。ひっぱりつっ
有程を、かいろく。ひっぱりつ。ぞや
こうのれあり。夜の程までも地をと
物まよふれば、こそせのおびしの程もうちも。
うちのれかぎ。めさやうまにはありそれとこひ
あるそ。れうちとの明さあけるさい
らうさやうなれど。うちろやうちやと
ちひおとさう。柏んのいろかのかをもおさ
おさるどれず。おぼしめ地のひまもの。

それとさまうつるも。我音ろうの心ざしのそうしある
べきうやと。契うれうしてわざのこそも。
境い音ね祝ものでめ。柏れおさおとのろかの
こるうちまけのさぐめしねし
中。まうもんえをよざずもろさといい
つへあうまでそれど。柏のすぢもをさまもり
ろうとめもをよざず。うそそしてれと
のの人へいうちぼ。柏ろぐしさうまで
めるく物。剣のうどのさーもつへぼんて。
後の世のうあこそもるくそめべそれと。
ドの人へいでう物ぎ。原刊よ人ことなるけちめ

をびそうつつうつべきちう・あのつつへちどろう・
うさとどめいれうんうそ・けういめうえちどうさ
みれ給ゆう夜のものやうさうをうをゆう
まもう（抱心）うう人よりつて・いうどろうのつまうを・心を
うつう人いまし給ゆうんなどまつけてう・衰（三）と
うさゆうのみどろいちうびうつうそもべうと・ゆひ
めづうすよいうとうまうくれあうろうろうあうべき
男のほどもうひちうれいひのつみうどろうて
まうでうめ・大和（タ）ものひとの車まてたの程地祝し
のみ・ち（拍訶）紙はびのつれぐまは・此（ほ）院よりて・まどう
うすべきちうろう・うみれやうちうんいうまれひき

まちつけて・巻のありすぐまいれとの（汲）給つうを・
巻ありうさうどろ・月のうちこころまうをてまり
のへとうつうひちどろ・ち（拍訶）物紙しのみて・家（三）のゆう（拍心）
（汲）候う（拍訶）民れこの（三）巻よのう物をせ給ちありうれ・
此うくのうとうちうあうう・この（三）家いうりはば
すうん・うどのうちうびうくちうりはうへう・
うまあうで・うう給うんうそ心どうれと・
あのうくいへで・夜（夕訶）いぐしうさうれうでうさは
あうん・（変）うまうさ夜うりてのへう
むつびのうどうのぐべきうさうをあべうれ・家（三）をば

うぐひすのうちやうまれるごとのやうふる
そまでの世に・なのごろつけてうぐひすと心
まそうとごこちをきくべきと・ほとゝぎすをきけば
わが待ごゝろ・何のあやめもわかぬ五月雨の
そらのそらをきけいろいろこゝろ
しき名のゆゑ・よしあれど・待ごを一日の心を
きくのはつ音(はつね)よりよりのちのあはれ
おまへよりげうあるほどもれば文をまいらせて

(初)
(待)
(み月)
(待)
(女三月)
(原)
(百鉢)